

目次

涙なみだと笑いのミステリー

サボテンの花

宮部みゆきみやべ

橋を渡るときわた

光原百合みつはら

六人の熱狂する日本人ねつきよう

阿津川辰海あつかわたつみ

編者解説へんしゃかいせつ  
千街昂之せんがいあきゆき

161

79

45

5



サ  
ボ  
テ  
ン  
の  
花



宮<sup>みや</sup>  
部<sup>べ</sup>  
み  
ゆ  
き



「やめさせてください」

若い教師はぐいと肩を張り、両足をふんばって勧告した。こめかみがピクピクしている。「ぜひとも、なんとしても、断固、あれをやめさせてください。さもなければやめさせてください」

権藤教師は、机の上の書類ばさみをなんとなくいじりながら、考えた。止めさせてください、と、辞めさせてください、か。そこで言った。

「宮崎先生、あなたは、今おっしゃった言葉を漢字で正確に書くことができますか」

沸き立つ怒りという熱湯に水をさされて、宮崎教師はまばたきをした。ビツクリ水というやつだ。権藤教師は思った。中華そばをゆでるときには途中でさし水することを忘れ

てはいけない。そのあともうひと煮立ちさせたら火を止めるのがコツだ。

だが、宮崎教師は中華そばではない。怒りはまたふつふつと沸き上がり、止まらなかつた。吹きこぼれてきた。

「教頭は私を馬鹿にしている」と、拳を握る。本当に顔が紅潮している。

「そんなことはありません。気に障ったなら申し訳ない。私はこのところ、子供たちの書き取りの成績の低下に頭を痛めているので、つい口に出してしまったのです」

丁寧に申し述べる。宮崎教師の憤激はだらだら坂を描いて降下していくが、態度は硬化したままだ。「降下」と「硬化」。なるほど。

権藤教師が今言ったことは、百パーセント真実ではないにしても、まったくの嘘でもなかった。教頭は現実には、宮崎教師のクラスで起きた書き取り事件を思い出していたのである。

二学期最後の国語の授業のときだから、一カ月ほど前のことだ。宮崎教師は、彼の担任する六年一組の子供たちに対して、同音異義語のテストを執り行なった。問いは十二問。ひらがなで読みを書かれている言葉に漢字を当てていくというもので、その読みに該当す